

定年俳句誌

5 2012年
月 号

かたね
ふ



黒羽集

(五)

佐藤喜仙

冬麗の川に光の耀へり

矢河原の渡しの跡や冬深し

枯蘆の中洲に残るばかりなり

冬の鷺河辺の枝に孤高なり



土手道や豊旗雲と枯尾花

河風に打ち伏せられし枯芒

寒禽の鋭き声に川淀みなし

一茶庵塵一つなき冬座敷

蠟梅や一茶の庭に枯山水

冬夕焼みりんの街をあとにせし

かせね集

白選句集



まんざく

松本周二

指揮棒の先の奔放蜷の道

紅梅の更紗錦の句を詠まん

菜種梅雨晴れてふうはり昼の月

金縷梅の光の中にうるみたり

江戸の雨ひとり操る浅蜷船

春禽や短詩ばかりの小詩集

春灯

川井素山

春

菅原

孟

春灯を波間にゆらす屋形船
城址の梅描く人の眞顔かな
蜜を吸ふ野鳥にゆるるやぶ椿
冴え返る紙漉く人の赤き指
鶯の初音の宿の朝餉かな
紅梅の蕾重たく野の弁当

雛

安藤虎醉

越後訛り

安木鼻金佐子

流し雛川の流れにまかせけり
つるし雛辰も吊るされ昇れずに
雛の舟夕映えの中流れゆき
つるし雛干子の根付も飾られし
夕映えの流れに雛の遠ざかる
天までも届けとばかり雛の塔

我が一世変ふ三月の十日かな
句会あり新人生の吾は喜寿
花見舟下町劫火忘れまじ
寒蜩今生のいのち吹き上ぐる
三月や大空襲に大地震に
釣り呉るる越後訛りの焼芋屋

撫子集

主宰選



料峭や草木いまだ醒めやらず

小池清司

春泥に塗られて亀の欠伸かな

春昼や額に眼鏡置き忘れ

赤紐のつるし飾りや伊豆の春

彼岸会の読経の声音艶めきて

出航の太き汽笛や寒椿

小林美登里

喝采を浴び雪中の大道芸

冬麗や日の斑のをどる濠の水

白梅にまざり紅梅弧高なる

鴨の池点景としての臥龍松

まだ固きつぼみばかりの梅の園

本郷宗祥

春一番花粉対策おこたらず

すべやかに水尾引く鳥ののどかなり

しばし見ぬ間に育ちをり名草の芽

沈丁花かたき花芽の目立ちをる

雪はねてすつくと立てる春の笹

岡野安雅

梅咲くや絵画教室賑ひて

老農夫野焼の煙に影写し

裏の戸を開け沈丁の香を入れぬ

四つ角の交通警察官マスクして

築地塀沿ひに歩みし梅見かな

田島昭久

春風に翅なびかせて雀の群

春浅し咲き残りをる冬桜

三桮の花咲き満ちて人集む

山茱萸のおくれて花の一二輪

那須野集

主宰選



手に残る移り香かすか桜餅

吉田啓悟

春風や瀬に出る魚の影早し

坂上じゅん

和の館軒の下なる残り雪

川風や土手に早々水仙花

春の燈の靴音しづか石畳

大空をまろく舞ひ行く胡蝶かな

母の忌は常に合掌冴えかへる

湖に落ち水に溶け込む春の雪

ここまでと鉄路は尽きてはだれ雪

花冷や難病の子をかかへ住む

山茱萸の黄のそれぞれに射す光

米田文彦

開花待つ桜の小枝空を突く

丸山酔宵子

スケッチに余念なき人エリカ咲く

夕霞川面見下ろす露天風呂

まんさくや築山からの風の道

月明かり蕾開くは桜かな

バス道のそのたび揺るる黄水仙

不意の雪赤提灯も霞む宵

雛飾る部屋に娘の晴着かな

焦げさうな目刺にレモンジュツとかけ

宵闇に浮かぶ春灯二つ三つ

青木英林

寒雀遠からず子供の遊び声

辻 紅葉

はこべらが占領したり空の鉢

水温む鯉の泳ぎも早くなり

空を切り軒で胸張る初燕

散歩道ベンチの脇に土筆坊

まんさくの彩る野山道狭し

なやらひに大音声の仁王立ち

梅咲くや友の病の治まりぬ

見下ろせば峡には白き梅の花

春雨や若枝細き栗畑

柳田皓一

この頃は鷹鳩に化す日和なり

長島清山

春雨のぬくもり楽し目覚めかな

春雨を眺め暮して水溜り

クリスマスローズ春日につぶやけり

クリスマスローズ春宵に沈みけり

合格も少年の日もはるかなる

春寒や迷ひ歩ける歌舞伎町

早春の樹々少し濡れ小糠雨

春昼の患者の多きはやり風邪

金田和代

山里の摘草料理春匂ふ

後藤克彦

夢うつつ朧の一夜過ごしけり

買物の主婦も手に手に春日傘

春の波碎くる泡に光の玉

街を行くはづめる心春衣

花の宴銘酒を提げて友来る

故郷の障子に映ゆる春灯

花吹雪足にまつはる散歩道

春灯や孫とたはむる白髪妻

吉田博行

大北風や人寄せつけぬ荒磯海

松本信子

寒梅に今年も集ふ友の顔

梅の香に誘はれ歩く小径かな

山間の小径に白い梅の花

小鳥らのさへづりたかしをちこちに

げんげ田にふと癒さるることのあり

垣仕立雪積むさまにこごめばな

萌葱色枇杷の新芽の天に伸び

揚雲雀かなたに聳ゆる浅間山

春の霜踏みて散歩の田舎道

菊地崇之

干鰈薄き身あぶり祖母好み

郡山真帆

孫娘の雛片付ける老夫婦

水温む服装も軽き通勤路

春灯や海辺の道の靄おぼろ

桜貝きらりと目に入る浜辺かな

柚の家春炉の煙絶えざりき

春眠の中で飛んでる我は鳥

植木市苔もつもの売れにけり

亀鳴くや時には師とも会はぬ事

寒明や裸木にさす薄緑

佐々木薫

湾岸の高きビルより冬三日月

松岡利秋

腰痛に鍼とやいとや冴え返る

真青な海に白波睦月かな

風に吹かれ辛夷の若芽小指ほど

万愚節羽箒で払ふ机の上

禅寺の御堂あまねく霞みけり

全天に雲一朵なき蝶の昼

別れたる背中霞に消えにけり

撫子集・那須野集鑑賞 三月号より

客員 村上克哉

撫子集

万両を添へて仕上ぐる床の花

本郷宗祥

千両に勝るといので万両という縁起のいい名前
がつけられ、温かい土地の樹下に自生し、庭にも植
えられる。夏白い小さな花をつけ、えんどう豆ぐら
いの果実は冬になると、赤く熟して美しい。床の間
に正月花を活け、仕上げに万両一茎を添えた。華や
かななかに、縁起を添えて仕上がった様を確かめて
いる満足感が伝わって来る。

東雲に今年占ふ初景色

小池清司

元旦に眺める景色は瑞祥に満ちている。暁天を見
渡して、昔天皇が国見をされたように明け方の明る
みが差し始めた空に今年を占う。雲一つ無い快晴な
ら、輝かしい希望に満ちたためたさ幸福感がある。
雨や雪であっても「御降り」と言い換え、雪は米を

連想させ「あまさがる」豊穰の前兆としてよろこんだ。

初恵比寿全力疾走福男

岡野安雅

一月十日に行われる戎祭り、商売繁盛、家内安
全を祈願するお祭り。兵庫県の西宮神社、大阪の今
宮神社、京都の恵美寿神社が代表例。開門神事福男
選びは西宮戎で行われる、福を求める人々でござた
がえす。福男選びの若者が全力疾走する様子はテレ
ビ放映もされて、なかなか迫力がある。漢字で十七
文字を纏めその迫力を表現した。

冬晴や関東平野の日の匂ひ

小林美登里

冬晴れは寒い日が続いたあとに、よく晴れて、お
だやかな暖かい晴天を言う。冬麗は春のうららかなさ
に例えたもの。関東平野は我が国最大の平野。都心
から離れた霞ヶ浦や隅田川、荒川の周辺の筑波山、
日光連山、上毛三山の間に広がる枯れ野や冬田の冬
晴れ眺望は、まさにあたたかな日の匂ひがする。(以
下略)

伝言板

1 第三回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2012年3月9日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室(別添地図参照)

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第四回本部句会

①日時 2012年4月13日(金)

14:00~17:00

その他事項は第三回と同じ

3 吟行(2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第三回吟行(原則第四火曜日)

日時 2012年3月27日(火)

13:30~15:30位

②第四回吟行

日時 2012年4月24日(火)

13:30~15:30位

その他事項は第三回と同じ

場所 新宿御苑
集合 新宿御苑正門前
入場料 各自負担 200円



4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。